



TITLE:

労賃の経済的及び道德的性質(二)

AUTHOR(S):

田島, 錦治

CITATION:

田島, 錦治. 労賃の経済的及び道德的性質(二). 経済論叢 1920, 11(1): 21-41

ISSUE DATE:

1920-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/127679>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第十卷 第一號

論 說

植民地の財政政策に就きて(一)……………法學博士 山本美越乃
租税の限度に就きて(二)……………法學博士 神戸 正雄
勞賃の經濟的及び道德的性質(二)……………法學博士 田島 錦治
鎌倉時代の家族制度(六)……………文學博士 三浦 周行

時事問題

極東緩衝國建設の企圖……………法學博士 戸田 海市
所得税の改正を論ず……………法學博士 小川郷太郎
北米合衆國の排外的海運政策と我海運……………法學士 小島昌太郎

雜 錄

所得税に就て武藤氏に答ふ……………法學士 汐見 三郎
米と社會政策(新著紹介)……………法學士 本庄榮治郎

附 錄

本誌第一卷乃至第十卷論題索引……………法學士 本庄榮治郎

勞賃の經濟的及び道德的性質 (二)

田 島 錦 治

第三節 勞賃の學說

雇傭勞働者の勞働を以て一の商品と見做し、其價格の高低は他の商品の如く重に需要と供給との關係に由りて定まると思考せる學說は、第十九世紀を通じて殆ねく行はれ、今日猶は之を眞理と信する者尠からず。ロブデン (Cobden) が「二人の雇主か一人の勞働者を追ふ時は必ず勞賃上り、二人の勞働者か一人の雇主を追ふ時は必ず勞賃下る」との簡明なる言は夙に此說を代表したるものと謂ふべし。然れども此言は未だ何故に二人か一人を追ふかを説明せず、勞働の供給若くは需要が如何にして増減し、因て勞賃を高低せしむべきを論究せざるの缺點ありとす。而して此等の論究に就ては (1) 勞賃基本說 (2) 勞賃鐵則說 (3) 勞働生産力說の三學說あり。而して上記の二說は共に勞働を商品と同視するに於て其誤を一にし、且互に密接の關係を有し、而して其異なる要點は、勞賃基本說は恰も商品の市場價格を取扱ふ如くに一の格段なる時の勞賃即ち勞働の市場價格に就て研究したるものなるが、勞賃鐵則說は恰も商品の正常價格を取扱ふ如くに長時期間に於ける勞

賃の額が如何に決定するかの問題、即ち勞働の正常價格に就て研究したるものと謂ふ可し。而して第三の勞働生産力説は、勞働を普通の商品と同視せずして、生産方便と見て立論したる點に於て前二説と太に異なる。然れども要するに此三説は種々の缺點を含み、特に勞働及び勞賃の道德的性質を蔑視するの短所を有するもの、如し。請ふ余をして逐次此等の諸説を簡短に論評せしめよ。

第一 勞賃基本説 (wage-fund theory)

此説はマルサス氏既に之を唱へジョン・スチュワート・ミル氏最も詳細に之を論述したるが、ミル氏はロンヂ氏 (Longe's Refutation of the wage-fund Theory, 1866) やウィリアム・シーントン氏 (Thornton's On Labour, its wrongful Claims and rightful Dues, 1869) 等の劇き駁撃に遇ひ、遂に改説して世人を驚かしたり (the Fortnightly Review, March number 1869)。但し其著經濟原理の中より此説を撤回するに及ばずして歿したり。(J. S. Mill, Principles of Political Economy, Bk II. Ch. XI, On Wages)。

此説に依れば、勞賃は勞働の需要及び供給に従ふ。供給とは、雇はれんことを求むる勞働者の員數なり。需要とは、勞賃として支拂はるべく投資せらるゝ流動資本の額なり。此資本を名けて勞賃基本(the wage-fund)といふ。此基本は貯蓄に因り、又は生産の増加に因りて、増加するを

得べきものなれば、其量は常に不變不動なりと謂ふを得されども、或一定時に於ては其量が確定せることを主張し得へし。此勞賃基本を勞働者總數にて除算して得る所の商は即ち平均勞賃なり故に平均勞賃は

(1) 勞賃基本即ち分配さるべき資本の總額を増加するか又は

(2) 勞働者の員數を減少するか

の二方法の何れかに依るの外、之を増加するを得ず。(1) 資本を増加するには貯蓄に依るを要し、(2) 人口を減少するにはマルサス氏の謂ゆる道德的節制 (moral restraint) を實行し、或は結婚を延期し、或は生殖を制限せざるへからす。

以上は勞賃基本説の概要なり、而して此學説は勞働者階級に向て甚た不幸不利なる結果を生ず(第二) 此説に従へば、勞働者は縱令勞働組合を組織するも、之に依りて勞賃を一般に増加せしむること能はず。縱令勞働組合に依りて或種類の職業の勞賃を増加するを得べきも、其増加したる額だけ他の種類の職業の勞賃を減少すへし、何となれば一定時に於て、勞賃として分配せらるべき資本は一定すればなり。

(第二) 此説に従へば、勞賃基本たるべき資本は唯貯蓄に依りてのみ増加すべきものにて、若し此貯蓄の増加が勞働者の人口増加より速ならば、勞賃は増加すへし。然るに勞働組合は決して

貯蓄を増加するものに非ず。

(第三) 以上の二つの結論よりして、更に左の結論を生ず。曰く勞賃の低落を防ぐ方法は、唯に勞働者の人口を制限するの一方方法あるのみ。

勞賃基本説の要領及び結論は前述の如し、以下其誤謬を辯せむ。抑も此説は左の二つの前提に基づきて立論したるものなり。

(第一) 勞賃は常に資本より支拂はるゝこと。

(第二) 或格段なる個人の資本中には必ず勞賃の支拂に充つべきもの豫め確定すること。又縱令然らざるも一社會の資本中には勞賃の支拂に充つべきもの豫め確定すること。

第一の前提は勞賃支拂の形式に眩惑して、其實體を忘れたるものなり。勞賃は形式上は資本の中より前拂を受くれども、雇主か之を支拂ふに方りては、多くは勞働の生産力を考慮して其額を定むるものにして、勞賃は結局生産物より支拂はるゝものなり。

次に第二の前提に就て批評せん。實際に於て格段なる雇主か勞賃として一定の金額を費さむと決意することは常に有り得へからず。何となれば雇主か其資本を勞賃に使用するの多少は之に因りて得べき利潤の見込の大小に由りて變動すべければなり。蓋し雇主は或勞賃の支拂に因りて相當の利潤を收むるを得ずと見る時は、從來勞賃として支拂ひ來れる額を減すべく。之に反して、

縱令勞賃を高くすとも之に對して相當の利潤を得へしと見るときは、彼は從來其享受方便として用ひつゝありたる財産をも資本即ち生産方便に轉用して、新なる勞働者の勞賃支拂に供し、又は舊勞働者の増給に使用すへし。個人資本中に確定せる勞賃基本なるもの存在せざるや斯の如し、果して然らば各個人の私資本及び國家及び其他の公法人に屬する公資本の總體たる所の社會資本中に斯の如きものゝ存在せざるは一層明白なりとす。且此説を要約するに勞賃の割合は勞賃として分配さるべき總額を勞賃受取人の員數にて除したるものなりとす、是れ一の重複詞なり。

第二 勞賃鐵則説又は必要勞賃説 (the iron law of wages, das eiserne Lohngesetz,

theorie de la loi d'airain.

前に述べたる勞賃基本説は、一の格段なる時の勞賃即ち勞働の市場價格に就て研究したるものなるが、長時期間に於ける勞賃の額か如何に決定するやの問題即ち勞働の正常價格に就て研究したる學説の一を勞賃鐵則説若くは必要勞賃説 (theorie du salaire nécessaire) と爲す。

勞賃鐵則(獨語にては勞賃黃銅法則)の名稱は社會主義者ラッサール (Lassalle) がリカルド氏の勞賃説に對して下したる所にして、同主義者か久しく之を以て資本主義を攻撃するの鋭利なる武器と爲したるものなり、然れどもリカルド氏の同時代に於てマルサス氏も亦略は同様の説を爲し而して同氏以前に於てテュルゴ氏は (Turgot) 此説に先鞭を著けたり。氏は曰く「總ての種

類の勞働に於て勞働者の勞賃は結局彼の生存を維持するに必要なる費額に限らるゝこととなるべき筈にして、又斯くなるものなり」云 (“En tout genre de travail il doit arriver et il arrive, en effet, que le salaire de l'ouvrier se borne à ce qui lui est nécessaire pour se procurer sa subsistance.”)

—V. Leroy-Beaulieu, *Essai sur la répartition des richesses*, p. 22.)

此説はセイ氏マルサス氏リカルドー氏等 (Say, Malthus, Ricardo) に由りて祖述せられたり。

今其要領を述ふること左の如し。

『自由競争が行はるゝ場合に於て貨物の正常價格が其生産費に従ふと同様に、勞働の價格即ち勞賃も亦其生産費に従はざる可からず。詳言すれば勞働者は商品たる勞働の賣手にして、雇主は其買手なるか故に、多數の賣手間と多數の買手間との兩方面に自由競争行はれむか、商品たる勞働の價格即ち勞賃は其生産費に従はざる可からず。而して勞働の生産費は恰も一の機械の生産費が(1)其要する燃料の價格と、(2)其減價補充積立金 (depreciation fund) とより成るが如く、(1)勞働者の日常の生活費と、(2)其人口を將來に維持するに足る家族の生活費とより成る可し。故に勞賃は必ず勞働者及び其家族の生活を維持して將來勞働者の人口を減せざる程度の最小額に於て定まらざる可からず。何となれば若し勞賃が此最小額を超ゆれば、勞働者の衣食住は餘裕を生して其人口を増加し、即ち勞働の需要に對して其供給を増加するか故に、勢ひ其勞賃をして再び此最小額

に低下せしむへく。又若し勞賃が此最小額より下るときは、勞働者の衣食住は缺乏して其人口を減少し、即ち勞働の需要に對して其供給を減するが故に、勢ひ其勞賃をして再び此最小額まで上らしむ可きなり』

若し此說にして眞なる時は、勞賃に衣食する所の勞働者は縱令其生産力は増加すとも毫も利益を受くることなく、而して總ての經濟上の進歩は唯に雇主階級のみを利して、勞働者階級を益せざるが故に、此兩階級間に穿たるゝ所の貧富懸隔の淵は益々深く成るべきなり。勞賃鐵則の名あるは即ち之が爲なり。

然れども此學說は學理上誤れるのみならず、亦實際の事實に違反せり。此說を生みたる歐洲の實際に就て之を見るにリカルドーやラッサール等が此學說を主張したりし間に於て勞働者の生計程度は著るしく進歩したり。又學理上より之を見るに此說は勞賃基本說と共に勞働を一の商品と見做す所の根本的の謬想を基礎とし、且此說は職業の種類に由り、國又は地方に由り、期節又は時代に由りて勞賃に差等あることを説明し難き大缺點ありとす。ジード氏は巧妙なる議論を以て此說を駁撃せり曰く

『若し此法則の示す所を文字通りに解釋せんか、勞賃は決して勞働者の生活するに物質上(material)必要缺く可からざる所のものより以上に上ること無しと謂ふこととなる。果して然らば

此説は過度に悲觀的にして明かに事實に反す。請ふ予をして之を論證せしめよ。何故に勞賃は各種の職業に於て同しからざるや、彫刻師又は機械師は普通人夫や苦役者よりは多量の窒素や炭素を要するや。何故に農村の勞働者の勞賃は暖を取り衣服を重ぬる爲に多くの費用を要する所の冬期に低くして、ヴィクトル・ユゴー (Victor Hugo) 氏か貧者の期節 (la saison du pitié) を稱せる貧民の生計を營むに尤も容易なる夏期に高きや。何故に諸勞賃は米國に於て佛國より、獨逸より、又は英國よりも高きや。何等かの生理上の理由にして米人か其人種上近接の關係ある英人獨人よりは多量の食物を要することを證明するものありや。何故に勞賃は前世紀に於てよりは今世紀に於て高きや。吾人果して吾人の父祖よりは一層大なる食欲を有するや。』と氏は左に論歩を進めて曰く。

『若し此法則の示す所を一層寛大に解釋して、謂ゆる必要勞賃とは啻に純然たる動物的生活を維持するに必要缺く可からざる炭素又は窒素の分量のみならずして、文明社會に於て生活する所の人の複雑なる欲望を満足する爲に必要な最小額なりとするとき、換言すれば若し勞働者の勞賃を定むるものは勞働者階級の諸慣習及び生活の種類に在り、生存の水平線を現はす所の生理上又は社會上、自然的又は人工的の諸欲望の總體に在りとし、若し前に指示せる富の不平等を説明するに生存の水平線 (le niveau d'existence) 卽ち英人の謂ゆる生命の基準 (the standard of life)

は普通人夫よりは彫刻師に大に、佛國労働者に於てよりは米國労働者に大に、十八世紀の労働者よりは二十世紀の労働者に大に、農村に於てよりは都會の住民に大なりとするならば、嗚呼これ賃を以て鐵則に従ふものと爲さずして、人種に由り、氣候に由り、時代に由りて變動するものと爲し、勞賃は文明人の欲望必要の増大するに従ひて絶えず昂進するものと爲すなり。……果して然らば此法則は最早や鐵には非ずして、勞賃の黃金法則と高く唱へ得べきものとなる可し』と (Gide, *Principe d'Économie Politique*, 14th ed. 1913, p. 560-151.)。

此論評は實に先づ余輩の意を獲たるものなり。未だ知らず自由派又は社會主義者にして果して能く此論評に答ふを得る者ありやを。宜なり現時の自由派にして復此必要勞賃説を奉する者無く、而して社會主義者特にリーブクネヒト氏 (Liebknecht) の如きは千八百九十年ハルレに開かれたる同主義者大會に於て此説を公然否定したりしこと。

第三 勞働生産力説 (theory of the productivity of labour.)

前掲の二説は労働者に對して甚だ悲觀的の者なるが、之に反して第三説は頗る樂天的結論に達する者なり。之を勞働生産力説と稱す、米國學者エフ・エー・ウォーカー氏は此説の代表者なりとす (F. A. Walker, *The Wages Question*, 1876.)

此説に従へば勞働の價值は彼の自由競争の下に於て只需要及び供給の法則に従ふ所の普通の賃

物の價值と同視するを得ず、何となれば勞働は只の貨物に非ずして生産方便の一なるか故に其價值は他の生産方便の價值と同しく其生産力に従はざるへからされはなり、例へば土地は亦一の生産方便なり故に企業者か他人の土地を利用せんとするや必ず其生産力に應じて之か地代を支拂ふなるへし。地主の側より地代を要求するに於ても亦同し。果して然らば他の生産方便たる勞働に就ても其價值即ち勞賃は其勞働者の生産力に従はざる可からず。

此學説は固より彼の社會主義者の主張するか如く、一企業の生産物若くは其價值總額を以てすへて其勞働者の生産したるものと爲す者に非ずして、勞働者は生産物價值の中より他の生産協力者即ち地主資本主企業者に向ての分前たる地代利子利潤の三を控除したる殘餘を、彼等の分前即ち勞賃として受取るものとす。而して地代利子利潤の三は其關係的分量か確定せらるれども、勞働者の分前たる勞賃は斯の如く確定せられず。而して此事は勞働者に取りて利益なりとす。是故に勞賃勞働者その他の生産協力者との關係は、後者は恰も財産の或定額を受くる諸相續者の如く、前者は其殘餘を總て受くる所の相續者の如しとす。是れ此學説に residual claimant theory of wages の別名ある所以なり。

此説の如く若し果して勞賃の割合か唯に勞働生産力のみに従ふならば、勞働者の運命は一に繋りて彼の腕に在り。其生産する所愈々大なれば其得る所は愈々大なる可く、彼の健康、德義、教

育の昂上、各種の發明發見、機械の利用等凡そ勞働の生産力を増加し又は完全にする所のものは必ず彼の勞賃をして上進せしむるの結果を來すへし。果して然らば勞働者は通常の勞働契約に依りて安心立命するを得、必ずしも合衆協約 (collective bargaining) や利潤配分方法 (profit-sharing) の如きに依るを要せざるへし。何となれば此説に従へば勞働の生産力の増加せる場合に於ける生産價値の増加の總てに對して獨り利益すべきは勞働者にして他の生産協力者は只確定せる又は寧ろ減少せる部分を分前として受くるに過ぎされはなり。

此學説か前掲二説に比して頗る樂天的慰安的なること斯の如し。而して勞賃が職業に由り、時代に由り、又國及び地方に由りて異なる理由を説明し得る點に於ても亦彼二説に優る。即ち彫刻師の勞賃が普通人夫より高く、米人の勞賃が佛人より高く、第二十世紀の勞賃が前世紀より高き理由は勞働生産力の大きなか爲なりと説明し得べきなり。要するに此學説は前二説に比すれば樂天的慰安的にして且一層真理に近しとす。然れども尙ほ種々の疑點あり。

(第一) 謂ゆる殘餘要求者 (residual claimant) の學理は果して正當なりや。

(第二) 勞働生産力のみか果して勞賃を決定すべき唯一の要素なりや。

先づ第一の點に就て述へんに、謂ゆる殘餘要求の説は勞賃所得以外の他の所得に就ても亦言ひ得べきか如し。例へば生産價値の總額を P とし利子を X とし利潤を Y とし地代を Z とし、而して

勞賃を W とするときは、 $P=X+Y+Z+W$ なり。故に

$$X=P-(Y+Z+W); \quad Y=P-(X+Z+W);$$

$$Z=P-(X+Y+W); \quad W=P-(X+Y+Z).$$

なり。果して然らば是れ循環論法の誤謬に陥るものと謂ふべし。

然れどもウォーカー氏は所謂る利潤を以て企業者の優秀なる企業的能力より生ずると思考す。即ち恰も地代か土地の生産力(農度并ひに地位の良否を含む)の差等に由りて差等あるか如く、利潤は企業者の企業能力の差等に由りて差等あり。而して或土地の地代の額は現在耕作せらるる最劣等地、即ち地代なき土地、即ち限界地耕地の生産額に比して超過したる其土地の生産額の部分に相當する如く、或企業者の得る所の利潤の額は現在生産に従事する最劣等なる企業者、即ち其生産價值か生産費を辨するに止まる所の限界的企業者の生産價值に比して超過したる彼の生産價值の部分に相當すと思考す。斯くして地代及び利潤は確定せる分前となる、而して資本主の得る所の利子は亦一般的利率に由りて確定すべき故に、結局利子利潤地代の三者は共に確定せる分前となると思考したる者の如し。

然れども企業者の實際得る所の利潤は其性質甚だ複雑にして、ウォーカー氏の思考する如き優秀なる企業能力より生ずるもの、即ち personal rent 若くは pure profit と稱すべき部分の外に、

偶然の機會に因る利得を含み又は獨占より生ずる利益を含むことあり、而して此等の收入は決して確定的のものと謂ふを得ず。之に反して雇傭労働者の通常受くる所の勞賃は却て實際に於て始より確定し、只労働組合又は同盟罷業等の力に依りて此確定額を變改することあるに過ぎざるなり。現時實際に於ては企業者は生産の主宰者にして同時に分配の仲介者を兼ね。即ち彼は其生産價值の中より地代利子勞賃等の生産費を支拂ひ、而して其殘餘を自己の所得とす、故に所謂 residual claimant は彼の労働者に非ずして、寧ろ彼自身なり。

(第二) 勞賃を決定する要素は啻に労働の生産力のみならず、尙ほ他に重要な一要素あり。曰く労働の夥多又は稀少といふ事是なり。蓋し労働生産力説は労働の需要の一面を重視して、之が供給の他面を忘れたるの批難を免れず。ジード氏は此缺點を説明するに經濟史上の顯著なる事實を擧げて曰く『米國に於て最近二十年間労働の生産力は驚く可き増加を爲したれども、其期間に於ては勞賃の率は殆んど昇らざりき。而して其理由は外國より移住し來れる労働者の増加と、利用せらるべき土地が大抵占有し了られたるか爲なり米國政府が啻に支那人の移住に對してのみならず、歐洲人の移住をも制限するの法律を設くるに至れるは之が爲なり』(Gide, p. 563-564.)

以上論評したる三學說の中、勞賃基本説及び勞賃鐵則説の二者は共に労働を商品と同視し、而

して勞働生産力説は勞働を生産方便として取扱ふものなり。然り而して生産方便たる勞働は他の生産方便たる土地及び資本の如く、其價值は其生産力の大小に従ふものと思考せられ、而して勞働なる生産方便を賣る人は勞働者にして、之を買ふ人は企業者なりと思考せらるゝか故に、結局勞働生産力説を主張する人も亦勞働を一種商品と見做す者なりとす。此勞働を商品と見做す者は果して正當なりや否や、請ふ次に之を論せむ。

第四節 勞働は商品なりや

正統學派に屬する學者は概して勞働を以て商品と見做し、少くとも特種の商品なりと思考したり、ルロワ・ボーリユー氏の如きは即ち是にして、氏は其著「Traite theorique et pratique d'économie politique」(6^{me} éd. 1914) 第四篇第十二章(第二冊第二百八十三頁乃至二百九十二頁)に之を詳論したり。今先づ其説の大要を擧げて、然る後之を論評せむと欲す。蓋し氏の如き代表的大家の説を擧ぐれば、其他之に類せる諸家の説は一々之を掲ぐるを要せされはなり。氏の説の要領は左の如し。

『勞働は一の商品なりとの提案は屢々經濟學書に繰返され、皮相なる又は偏頗なる批評家の一部をして之に對して惡聲を放たしめたり。されど「勞働は一の商品なり」といふ事より「勞働者は一』

の商品なり」といふ結論を生ぜず、供給せらるゝ物品と之が供給者とは同じからず。労働は一の商品なりといふは誠に争ふ可からざる事實を根據とす。労働は賣買せられ、其價格は博愛又は慈善に因らして買ふ者と賣る者との利益の均衡 (la balance des intérêts) に因りて定めらる。労働の價格は有らゆる商品の價格の如く、決して人意を以て恣に定められたるものに非ず、經濟上の法則に従ひて或は昂り或は降るものなるは歴史及び現在の事實の明證する所なり。

労働は一の商品なりとの提案を憎惡する批評家と雖も、其多數は少くも其一生の大部分に於て労働を商品として取扱ふなるへし。即ち彼等か労働者又は婢僕を雇入る、場合には時の相場を調べて世間並の勞賃と大差なき勞賃を彼等に與ふるなるへし。若し或格段なる場合に於て世間並に外れたる事を爲すことあるも是は博愛又は慈善なる特別行爲と謂ふ可く、固より合法的にして且往々稱賛を値すへし。勞賃は一の商品なりと謂ふは決して雇主と労働者との間に存する同情又は恩誼の感情を無視するには非ず、唯赤裸々に人の労働の價格が稀有の例外の外は此等の感情よりは一層一般的、永續的、正確的にして且ヨリ少く個人的及びヨリ少く引續き變動する所の原因に由りて定まるものなるを證明せんとする而已…………。

前述の如く労働は一の商品にして其價格は自然法則の働き (l'action de lois naturelles) に由りて定まれども、労働は他の一般的商品と異なる所の或る特殊の性質を帶ふる商品なり。

第一。勞働若くはカール・マルクスの所謂勞働力 (Arbeitskraft) は本來勞働者の身に結び着けるものなり。此勞働力は其所有者及び供給者たる勞働者を勞働の購買者の或る羈絆の下又は從屬關係の下に置くか、又は少くとも彼の指揮監督の下に置くに非されば之を賣るを得ず。……。

勞働の購買者とのか供給者との間の關係は他の總ての商品の買手と賣手との間の關係よりは一層繼續的にして一層固定的なり。通常の商品に在りでは、其物の引渡は瞬時に行はれ、引渡の後には賣手と買手との間の關係は止むを常とす。之に反して勞働に在りては期間拂勞働の場合には引渡 (勞働なる商品の) は各瞬間を通して行はれ、出來高拂勞働の場合には引渡は接續せる間隙毎に更新す。而して後場合に於ても勞働者は概して勞働の買手 (即ち企業主) に屬する機械及び原料を使用し、而して勞働の買手に取りては勞働の賣手即ち勞働者をして成るべく少時間に於て成るべく多く有効に機械及び原料を使用せしむるを利益とすへし。斯くして勞働の買手と其賣手との利害は紛糾錯雜して、他の總ての商品の買手及び賣手の利害と往々大に其趣を異にする所の種々の問題及び爭議を生ずるに至れり。……。

第二。勞働力と此力の所有者とは其所在の場所を異にするを得ず、從て勞働の地方的潤澤と缺乏との平均、即ち勞働の供給と需要との平均は他の一般商品に於けるよりは之を實現せしむること甚難しとす。勞働者の感情及び慣習は往々彼等をして其勞働力に對して他の地方よりは僅かを

支拂ふ如き地方に止まらしむ。是故に勞働の潤澤稀少、及び報酬の額を知らむと欲せは、他の商品に就て何等の影響を及ぼさる。或特殊なる要素を計算中に入るゝを要す。即ち道德的若くは倫理的要素 (l'élément moral ou éthique) 是なり。……

勞働力は小麦や石炭の如くに移動せず。小麦又は石炭又は他の總ての商品の價格は二の異なる地方に於て、少くとも長期間に於ては、其貨物の最も低價なる地方より最も高價なる地方に之を運送するに要すへき運賃以上に差異を生ぜざる可し。然るに異なる地方に於ける勞働の價格の差違は非常に此運賃の額を超ゆるものなり。

多くの經濟學者は人の意思 (volonté) を定むる、若くは意思に影響する所の種々の原因を總て充分に計算に入れますして、往々人の意思を以て引力の法則、即ち經濟界に於て個人的金錢的利益 (l'intérêt personnel pécuniaire) の形式を取る所の法則に盲目的に従ふ所の情性的意思 (une volonté inerte) なるかの如く思考す。

第三。此特殊の商品即ち勞働に就ては、之か供給者即ち賣手は概して之か需要者即ち買手よりは其數甚だ多しとす。此點は他の商品に於て其買手の數か賣手の數より甚だ多きと全く反對す。靴や帽や肉や又は麵包を需要する人衆は此等の物品を賣る商人よりは遙かに多數なり。之に反して文明の進める國に於て、特に大資本を以て生産を行ふ處に於ては、各種の技術的專業の下に腕又

は個人的能力を提供する人衆の數は之を買入れ及び雇入るゝ人に往々出會せざる程に多しとす。斯の如く勞働の賣手は遙かに其買手(少くとも慣例的買手)の數に超過す。此事情よりして勞働の價格に就ては他の商品に就て見ざる所の結果を惹起すものなり。勞働者即ち勞働なる商品の賣手の間に組織又は一致 (organisation ou entente) の成立せざる場合に於ては、彼等より遙かに少數にして一層容易に團結し得る所の買手の地位は或定まれる事情の下に於て、少くとも暫時の間は賣手よりは遙かに有利にして且優勢なり。

第四 勞働若くは勞働力と地の一般的商品との間に尙ほ一の差別あり。それは前者は後者の大部分よりは一層不耐久的 (plus périssable) なることなり。他の一般的商品、例へば小麥、酒類衣服、燃料は永き時の間、毀損することなく、之を蓄積保存して、直ちに消費せず、適當の時期の至るを待つを得れども、此勞働なる商品は各瞬時に買手を見出すを要し、買手なければ損失して、逆も蓄積保存し得へからず。……………

且此商品は數日引續きて賣れぬ場合に於ては、啻に其賣れざりし數日分の勞働が損失に歸するのみならず、其勞働を發生すへき永久的根源即ち人體の組織が損失せらるへし。此組織 (organisme) は食餌溫熱等不斷の規則正しき欲望を有し、之を満さずれば此組織は忽にして疾病に罹りて恢復し難き損傷を受け、又は死に由りて絶對的に滅失す。……………

夫れ斯の如く労働は一の商品なることは毫も疑を容れされども、種々の點に於て特殊の性質を帶ふる商品なり。是故に労働又は労働力は他の商品と同様に取引談判せられ又は賣買せられず。

其一般的法則 (*lois générales*) に従ふことは疑無けれども或偏倚或輕減 (*certaines déviations, certaines attenuations*) を以て之に従ふものなり。即ち學理的法則と實地との間には英人の所謂 friction (磨擦) に因て生ずる抵抗) なるもの往々介在して労働市場に於ける經濟的法則の實現をして他の商品の市場に於けるよりは遲緩にし、又は不純ならしむ。然れども之か爲に此經濟的法則は行はれざるに非ず、特に長時期に於ては労働市場に於ても他の市場に於けると同一の法則の行はるゝを見るへし。只或る外部原因 (*causes extérieures*) 或る非經濟的秩序 (*ordre extracéconomique*) が少くとも暫時の間此法則の行はるゝことを妨ぐることをあるのみ』

ルワ・ボーリユ氏が労働若くは労働力を以て一の商品と爲し、而かも特殊の商品とするの理由は上述の如し。然れども氏の列舉せる四項の理由は反對に労働は商品に非ずとの理由と爲し得へきか如し。抑も物の種別を爲すに當りて其共通の性質又は成分の大部分に重きを置かは、茶も酒も乳も血も皆水なりと謂ふの論結に達すへし。ボーリユ氏が労働を商品なりとするは亦之に似たるものなり。且氏は特殊の商品なりといふ點に就て數千言を費せり、何ぞ始より労働は商品に非ずと謂ふの直截簡明なるに若かんや

假りに一步を譲りて勞働は商品の如く取扱はるゝこと有りとするも、是れ勞働力が賣らるへく提供せられたる瞬時に限る。衣服及び食料品は商人の店舗に在る時は商品なり。然れど消費者が之を買取れば享受方便となる。機械及び原料は商人の店舗に在る時は商品なり。然れども製造人の工場に使用せらるゝ時は生産方便となる。此點に於て勞働力は恰も機械及び原料に似たるものなり。余はボーリニエ氏に反問せん、氏は數年間一の工場に勤續する職工又は永小作人の勞働の如きをも商品なりと見做すや否や。是等の勞働が商品たる爲には是等か日々勞働市場に繰返し提供せらるゝものと想像せざるへからず。現時文明諸國に於ては固より多數の失職者轉職者等ありて日々勞働市場に職を求むる者あるは事實なり、而して彼等の勞賃は恰も商品取引所に於ける商品の如く、其瞬間に於ける需要と供給との關係に由りて定まる場合多かるへし、然れども此等よりは數百倍多數なる勞働者は繼續的常住的に其業務に従事しつゝあることを牢記せざる可からず。然らば則ち勞働は商品なりと謂はんよりは寧ろ機械の如き生産方便なりと謂ふの優れるに若かず、余か前節に述べたる如く勞働生産力説が勞賃鐵則及び勞賃基本説に勝る所以も亦茲に在るなり。各種の勞賃が勞働市場に於ける日々の相場に由りて定まらして實は繼續的常住的に執務せる勞働者の生産力を基礎とするもの多きは經濟事情に通ずる者の皆認むる所なり。

然れども勞働を以て機械と同視するは亦一の誤謬なり。機械及び其他の資本は勞働を補助する

ものなり、而かも勞働に由りて生産せられたるものなり。故に勞働は父なり主なり、資本は子たり従たり。冷酷なる企業者は往々勞働を機械と同視し、機械を間斷なく働がすことか彼の利益なるか故に勞働者をも亦成るべく長時間休息なしに使役せんとすへし。斯くして此誤れる思想は企業者の私人經濟的利益と握手して、思ひへき勞働問題を惹起したり。

由是觀之勞働は商品に非ず、又生産方便としての資本と同視す可からず、實に是等を超越する所の高尚神聖なる人の經濟的兼道德的行爲なりとす。從て勞働の價格たる勞賃は決して流動資本額とか生計最少費とか又は勞働生産力とか言ふか如き單一なる經濟的原因に由りて定まるもの非ずして、更に複雑なる社會的道德的原因の影響を受くるものなり。(未完)